

農地を保全し活かすための自治体と市民の協働

元開成町長 日本大学総合科学研究所教授 露木 順一

はじめに

今ご紹介をいただきました露木です。開成町は、横浜から見ると一番西の外れで小田原の隣にあり、面積は神奈川県で一番小さな町です。その町長を 13 年間務めました。その前は NHK の記者でしたが、私の父も町長をやっていて、言ってみれば親子 2 代町長をやらせていただきました。現在は日本大学の総合科学研究所に籍を置き社会的な実体験がある人たちを集めて、いろんな取り組みをしております。

今日会場にいらっしゃる方はほとんどが横浜とか、都会に住んでいられる方が大半だと思います。本日の「市民参加による多様な〈農的空間〉の活用と展望」のオープン研究会の基調講演の依頼を受けたとき、私の町の環境と上手く話がつながるかなあと心配をしました。しかし待てよと。逆にこれから全く新しい社会をつくりだしていこうとするのならば、むしろ都会のほうが地方の小さな町の成果を上げているさまざまなやり方を取り入れて、人間的な暮らしを探っていく。そういう時代に入っているような気がしまして、私の実体験も少し参考になるのではないかと引き受けさせていただきました。

人口が増えている開成町

開成町が今注目されている大きな理由は、人口が増えていることです。しかも子どもの数が現在はほぼ現状維持となっていますが当分の間増加が続きました。女性が一生に産む子どもの数の割合（合計特殊出生率）は 1.6 ぐらいで、毎年神奈川県でトップレベルです。よく皆さん、なんか特別な手品があるんじゃないか、その手品を真似すれば、自分の所も増えるのではないかという発想に陥るんですが、それは間違いです。一朝一夕にできる話ではありません。開成町の場合は、約半世紀、50 年近くに渡った政策の成果が今表れているといえます。ですので、もし人口をある水準に留めたい、あるいは活力を一定の水準で維持したいと思うのならば、少なくとも 20 年 30 年、長く言えば 100 年の単位で考えていかないと、人口問題の解決はできません。そうすると、「なんだそんな先か。

俺の生きている間の話ではない。」と、すぐなります。でも今、着実に一つ一つやっていかないと、ひどいことになるわけです。

今、神奈川県の町村レベルでは人口が増え子どもの数も維持できているのは、開成町だけです。横浜市ですら、都筑区とか港北区は人口が増えているかもしれませんが、すでに減少している区もあるという実情です。

美しい景観の町づくり

開成町はちょうど 50 年前、都市計画法の抜本改正に合わせて総面積が 6.55km² という本当に小さな町を、水田と住宅（昔からの集落）と開発の三つエリアに分け、一貫した土地利用政策に基づく町づくりをしてきました。

町北部の水田を整備しました。集落をきれいに整えるために、公共施設を町中央部の住宅地のエリアに集中させました。私が小さい頃は駅もありませんでした。小田急線の開成駅を誘致しました。駅を誘致した周辺を開発エリアに決めたのが東京オリンピックの翌年（1965 年）でした。町の南部に当たります。私の父が町長だった時です。オリンピックで経済は右肩上がり、田中角栄さんの『日本列島改造論』がそのすぐ後に出た、いけいけどんどんの時代です。普通開発というと、こちらの水田をつぶして住宅を建てる、あっちの水田をつぶして何かを作るという話です。しかし私の父は、町長になった直後に逆をやりました。皆が一斉に開発をしているときに、水田エリアでは開発に網をかぶせ、勝手に開発をできないようにしました。神奈川県の西部と言えども、ほどほどの交通の利便性がありますから、放っておけばどこでもパッチワークのように開発されてしまうような流れの中で、俗にいう都市計画を確立して、特に土地利用の制限を掛けたのです。

当時の水田は、言ってみれば曲がりくねった農道、ぐちゃぐちゃな道路でした。それをきれいに畦道を整えて、機械も入れる美しい水田エリアを作りました。これは専門用語で圃場（ほじょう）整備と言います。ただ真四角の水田を造っただけではなく、この畦道に

紫陽花を植えたんです。あたかもこのエリア全体が公園であるような景観を造ることを最優先しました。水田をただ単に整えただけでなく紫陽花を植えることで付加価値を付けた訳です。観光資源が新たに創造されました。この紫陽花の景観が徐々に有名になって、1985 年にはようやく開成駅も開業しました。そしてここを訪れるような人たちが増えて、駅周辺エリアの開発が少しずつ進むようになりました。こうして水田の景観がヒットしたことで始めた「開成あじさい祭」は現在も続いており、今年は 21～22 万人が来場しました。

人口増加の背景

こうして人が訪れるようになると、あの町は結構町がきれいで農業を大切にしている。結構住みやすそう。ほどほど便利だ。だったら住んでみようかということで、徐々に他地域から人が住むようになってきました。1990 年代初頭バブルがはじけたときは、皆大騒ぎでしたが、私の町は逆です。土地の価格が下がったことで、中間所得層ぐらいのサラリーマン等が土地を買えるようになって、若い人たちがどんどんこのエリアに住むようになって、子どもの数が増えているという状況です。いまでは都市部からも随分来られるようになりました。新幹線通勤の人も結構いらっしゃいます。このように、水田を守るエリア、公共施設を中心に集落を近代化するエリア、そして新しい開発エリアをうち立てて、その方針を 50 年間守り続けているのです。

水田を守り続ける

町づくりというのは、バトンタッチです。うちの父が、この圃場整備をやろうと手がけた時は町内から猛反対がありました。ひとつは、農家の人たちは先祖伝来の土地をたとえ少しでも公共的にいじられることに反対でした。それからもう一つは、「農業なんてのは、もう遅れた産業だ」という風潮の中で開発優先を主張する声は強かったです。私の父は私が小学校 1 年のときから、20 年間町長をやったのですが、最初の町長選挙は 7 票差でした。それから先ずっと開発が争点になった選挙ばかりやっていたから、なかなか町内が治まりませんでした。そこで小田急線開成駅を何とか誘致したいと父は一生懸命やりましたが、83 年に町長を辞め翌年急死しました。小田急線開成駅が開業したのは次の年 1985 年でした。待ち望んでいた開成駅を見ることはかないませんでした。しかし一貫した土地利用

政策を堅持した結果がようやく花開いたと満足していると思います。

町が乱開発されなかったことが大きいです。特にきれいに整備された農地が残っていました。それで私がこの財産を守り活かして新たな町づくりを推進しようと 98 年に町長になったんです。猛反対があっても、方針を曲げないで 20 年間農地を守るの、簡単ではありません。周りはどんどん開発しているわけですから自分の所が遅れているみたいにも見えます。でもそうじゃないと言い続けることは非常に困難なことだと実感しています。そこで私は、自分がメディア出身であったこともあり、NHK など紫陽花の里を徹底的に売り出しました。また富士フィルムの研究所を誘致しました。研究員の人たちがほっとできるような空間があるから、ぜひ来てくれということを盛んに訴えました。これが功を奏して、2006 年に富士フィルムが約 500 億円投資して研究所を建てました。それから新しい小学校を建てました。学校の用地は事前に確保してありました。校舎の建物の内側は木をふんだんに使ったこともあり、あの小学校はものすごく施設の整備が整っているから子どもを通わせたいという若いお父さんお母さんが、学校の周辺に土地を求めて今移り住んでいます。教育施設は単に教育の場として捉えてはなりません。人口を引き寄せる強力な吸引力があることを知ることが大切です。こうして人口が増加し、子どもの数も増加しました。要するに、土地を早々と用意をしてくれたことがあって初めて、今日政策の花が開いたということです。土地利用政策がいかに大切かをわかっていただいたと思います。

しかしながら、開成町でも農業だけでは食べていけないので、農業の就業者は減り兼業農家が圧倒的です。現在専業農業は全就業人口のうちの 3 パーセントくらいです。ただ、きちんとした水田を作って、残していこうという風土は開成町の言ってみれば DNA です。江戸時代の小田原藩のエリアですが、一番おいしいお米がとれるエリアでありました。ですのでその水田というのは、言ってみれば町のシンボルなのです。町の一番大切なものは水田とその景観でありそれを守ることを町の土地利用の根幹に置いたことは自然に摂理にかなっていたと確信します。それだからこそ今花開いているのだと思います。先人の努力に感謝しています。

開成モデルの応用を考える

今日開成町の町づくりでお伝えをしたいのは、いろ

んな問題点があって難しい、難しいということはわかるのですが、難しいからといって手をこまねいて何にもやらなければ何もできません。ある一定の年月、30年でも50年でも良いので長期のきちんとした大構想を決めて、そこから着実にやっていけば、必ず成果は生まれます。途中でやめて、違うことをやるから右行ったり左行ったりしてしまうのです。そういった所を、ぜひ知ってもらいたいと思います。それからバトンタッチ。要は自分のときはちょっとしんどいかもしれないけれども、その成果を次に渡す。こういうようなやり方、ゴールを目指して襷をつなぐ駅伝みたいな心構えで町づくりをしていけば必ず成果が生まれてくるということです。

それから会場の皆さんが町づくりで悩んでいらっしゃるなら、地域を代表するシンボルは何なのか、それを守っていこうという発想で町を興していくこと。これがまず1番目重要ですね。よく守るというのは触っちゃいけないことと思うかもしれませんが、それは大間違いです。人が出入りをして、人が関わるから景観が守れるのです。人が使えるようにするためにはある程度手を加えないと自然景観は守れません。

10年前に開成町の水田の一角に300年ぐらい続いた古民家がありました。あばら家で今にも崩れ落ちそうでした。そこでご主人が先立たれてしまって、奥さまが1人で何とか守っているかやぶき屋根の屋敷を再生させようと思いました。今、この瀬戸屋敷の古民家は地域のシンボルとなりました。修繕に4億4,000万円掛かったのですが、無借金で建てました。なぜかという、非常に単純明快なんですけれども、首長の情熱です。当時県知事の岡崎洋さんは環境省の事務次官まで務められた方ですが、景観を保つということに非常に熱心でした。そこに直談判に行って頼み込んだわけです。「開成町は金がない。何とかしてほしい」と。そうしたら岡崎知事はもと大蔵省（現財務省）官僚でもあり、お金の算段が非常に上手な方で、農林水産省から金持ってきてくれたんです。だから4億4,000万のうちなんと6割を補助金で賄えたんです。残りの4割を年に3,500万ぐらい出して5年間で分割払いました。

コミュニティの再生

それぞれの地域で何かを生かしながらコミュニティを活性化させたいというご希望を持っていらっしゃる方がたくさんいらっしゃると思います。その夢を叶えるのは、まず守るものは何なのか、何をシンボルにし

て守るのか、それを再生することによって多様な人材がどんどん生まれてくるというのが開成町の町づくりから読み取れるいわば法則のようなものです。昔ながらの商店街を蘇らしたいと思ったならばその商店街を象徴するものは何なんだろう、このエリアを象徴するものは何なんだろう。そこを市民の力でよみがえらそうという息の長い取り組みが、商店街の再生と活性化につながっていくと確信しています。その方向さえ間違えなければ、紆余曲折はあっても、知恵はいくらでも出てきます。

行政は、そうした市民の皆さんの活動を側面から応援する。これが非常に大きな効果を生みます。どうしても市民には手に負えないような大きな基盤整備事業があるとするれば、それは行政の役回りです。そこはトップがどうリスクをとっていくのかという、気概と責任の部分になります。市民や町民が主役と言っても手に負えない部分は当然あります。そこは行政がきちんと手当てしないと町づくりはできません。住民主導や住民参加を行政の責任逃れに使ってはなりません。行政の役割はあります。基盤整備はその最たるものです。首長が最終的責任を負って対処する課題です。話が横道に逸れますがとんでもないスタジアムを計画して、いざやってみたら予算がふくらみ、あいつのせいだこいつのせいだと責任逃れをしているような話は論外です。誰一人もリスクをとって俺が悪かった、俺の責任だと言い切れる人がいない日本の中核の政治は、ほんとうに嘆かわしい限りであります。

開成町はその逆をやったから、小さくても着実に実績を積み一貫した持続性をもったことで今日があります。ぜひ皆さんの活動も小さいエリアで取り組んでみてください。小さな積み重ねが大きな成果を生みます。一度開成町にもお越しいただければと思います。私の話したことを実感として感じていただければと思います。

(つゆき じゅんいち)

